

第2部

研究によせて

非常用リュックの中身から見える保護者の安全意識 ～幼稚園における非常食の備え～

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園

養護教諭 木林晴美

1. はじめに

近年、地震や豪雨などによる自然災害が全国のどこで発生してもおかしくない。しかしながら、災害発生時を想定した幼稚園での備えについて考えておく必要があるという意識はあるものの実際には不十分という現状にある。本園では、様々な場面を想定した避難訓練の実施はこれまでも行っていたが、強い地震などの発生により保護者がすぐに迎えに来ることが困難な場合も考えられることから、非常食の備えについて検討し、平成 28 年度の 9 月に幼児一人一人に非常用リュックを準備することになった。その中身として、最低限必要と思われる水と非常食（保護者が迎えに来るまでの数時間に対応するもの）を考え、食物アレルギーのある幼児もいることから保護者に購入してもらうことにした。実際に幼児の非常用リュックを回収してみると、幼児一人一人のリュックの重さや膨らみ具合があまりにも異なることから、その中身等について調査し、考察することにより、幼児の非常食にはどのようなものが適当であるか考えるとともに、それを準備した保護者の意識を探ってみることにした。

2. 調査方法

① 全園児 118 人（平成 28 年 9 月）の非常用リュックの中身調査（調査 1）

園児一人一人の非常用リュックの中身を養護教諭が調査した。水の賞味期限は、1 年未満、1 年以上 2 年未満、2 年以上 3 年未満、3 年以上に分けて確認した。非常食の種類は、ビスケット類、栄養補助食品、乾パンなど 9 項目に分けて確認した（該当したものを数えたため複数回答もある）。熱量は、非常用リュックに入っていた非常食の総熱量を計算した。

② 保護者アンケート（平成 29 年 1 月）回収率 約 83%（調査 2）

保護者アンケートは平成 29 年 1 月の学年懇談会（各学年の保護者がほぼ全員参加）で非常用リュックの中身調査（調査 1）の結果を説明し、保護者の同意を得た上で配布した。購入先は、スーパー、ホームセンター、インターネットショッピング、通販、その他に分けて回答を求めた（複数回答）。購入の際に気を付けたことは、できるだけ賞味期限の長いもの、子供が好きなもの、熱量が大きいもの、小さくてかさばらないもの、その他の 5 項目に対して回答を求め、その他は自由記載により記入を求めた。非常用リュックに入れるものに対する子どもの名前の記載は、記名した、記名しなかったの 2 項目により回答を求め、記名しようと考えた理由、しなかった理由は自由記述により記載を求めた。非常食を準備する際、困ったことや気付いたことについては自由記載により回答を求めた。

③ 全園児 115 人（平成 29 年 4 月）の非常食リュックの中身調査（調査 3）

調査内容と方法は平成 28 年度と同様に、養護教諭が一人一人の非常用リュックを確認し、水の賞味期限、非常食の種類、熱量を確認した。



倫理的配慮

園長に実施の同意を得るとともに、職員の共通理解のもと行った。非常用リュックの中身と保護者が特定されないように I D 番号を用いた。また、アンケート調査は、無記名自記式で行い、保護者が安心して回答できるように箱を準備し提出できるようにした。研究の報告後一定の期間データは保管し、その後確実に廃棄する。

3. 非常用リュック設置

平成 28 年に非常用リュック導入について職員で検討し準備を行った。幼児の身体に合ったサイズのリュックを購入し、9 月に設置した。リュックの色を学年カラーとし、クラスと氏名を書いた名札をつけ、個人のリュックであることが識別できるようにした。3 年間（2 年保育児は 2 年間）同じリュックを使用し、保護者に中身（非常食）の準備を依頼し、一度、幼児のリュックを自宅に持ち帰り、中身を入れて園に保護者が直接クラスのコンテナに提出する方法をとった。コンテナの保管場所は、避難訓練時の一次避難場所でもあるプレイルームの倉庫とし、いざというとき出せる場所に設置した。その後の実践経過を表 1 に示す。

表 1 非常用リュックの実践経過

<p>H 2 8</p>	<p>非常用リュックの導入 (9 月)</p>	<p>★職員で共通理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学年カラーのリュックを園の備品として全園児分購入 ・ 保管用コンテナを準備し、プレイルーム倉庫に保管 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 非常食や水の購入について保護者に依頼（お知らせ文作成） （食物アレルギーのある幼児への対応） ・ 非常食の回収は、保護者がリュックを持ち帰り、中に非常食を入れて園のコンテナに直接入れる方式（リュックに通し番号あり・名簿で保護者が確認） <p>回収してみると・・・</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>リュックの重さ・膨らみがあまりにも違う 何が入っているのか？</p> </div>
--------------	-----------------------------	---

	非常食調査 保護者アンケート	<div>非常食の量に格差・1年以内に賞味期限切れ・記名の有無など</div> <div>・学年懇談会</div> <div>↓</div> <div>保護者の意識を調べる（学年懇談会でアンケート用紙を配布）</div> <div>↓</div>
	保護者の安全意識を高める	★職員で共通理解 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者への知らせ文の改善（記名、安全な容器、熱量の目安の提示など） ・幼稚園での備蓄水の整備検討 ・保温用アルミシートの購入（幼児分） ★学年懇談会で保護者に結果を知らせ、非常食について考える（備蓄と非常食の違い、非常食の例、安全面について）
H29	非常食リュックの活用	★職員で共通理解 <ul style="list-style-type: none"> ・非常用リュックの取り組み継続 ・非常用リュックを活用した避難訓練の実施
	非常食調査	<ul style="list-style-type: none"> ・非常食の変容 ・保護者の意識の変化 ★学年懇談会で保護者に非常食の変容を知らせ、家庭での備えについても啓発

4. 調査結果

1) 水の賞味期限の年度比較（図1）

調査1（H28年9月）では、「1年～2年未満」が多かったが、調査2（平成29年9月）では、「1年未満」「1年～2年未満」の割合が減少し「2年～3年未満」「3年以上」の割合が増えていた。

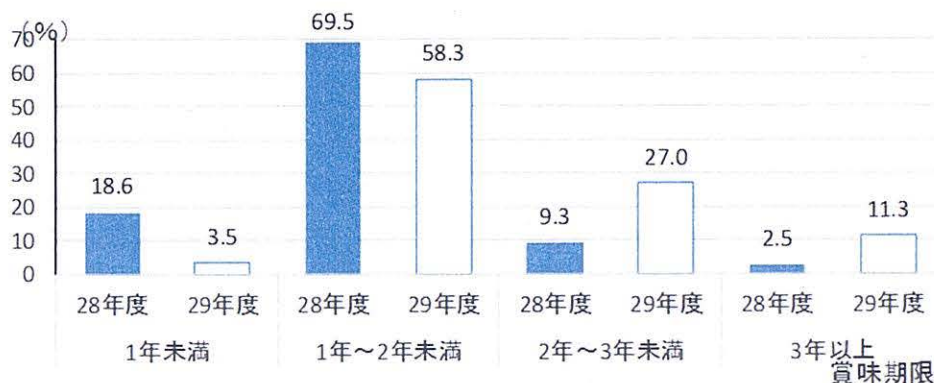


図1 水の賞味期限の年度別比較

2) 総熱量の年度比較 (図2)

調査1 (H28年9月) では、「300～600kcal」が多かったが、調査2 (平成29年9月) では「300 kcal未満」「300～600kcal」の割合が減り、「600～900kcal」の割合が増えている。

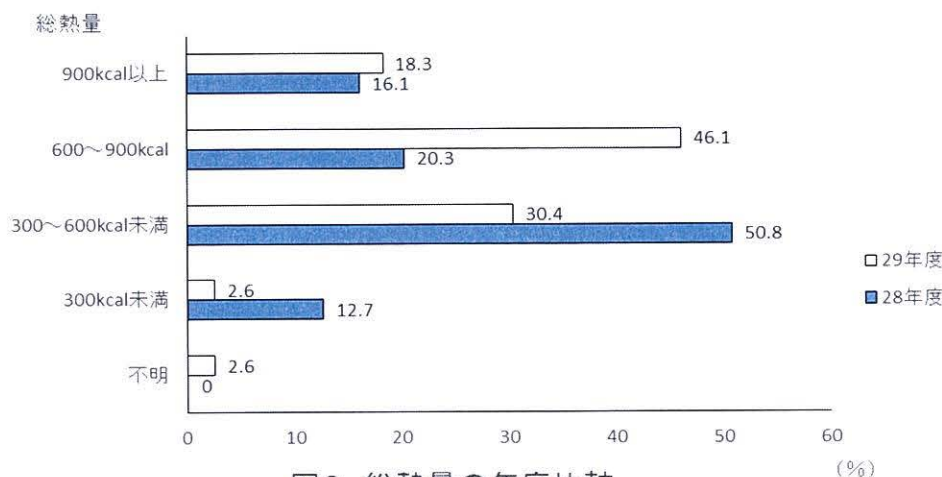


図2 総熱量の年度比較

3) 非常食の年度比較 (図3)

調査1 (H28年9月) では、非常食の種類は、缶入りのビスケットや乾パン類や手軽に摂取できる栄養補助食品が多かった。その他、保護者の判断でリュックに入れられていたものにはティッシュ、タオル、スーパーマーケットの袋等 (4名) があり、非常食の缶に我が子へのメッセージを記入する保護者 (1名) も見られた。

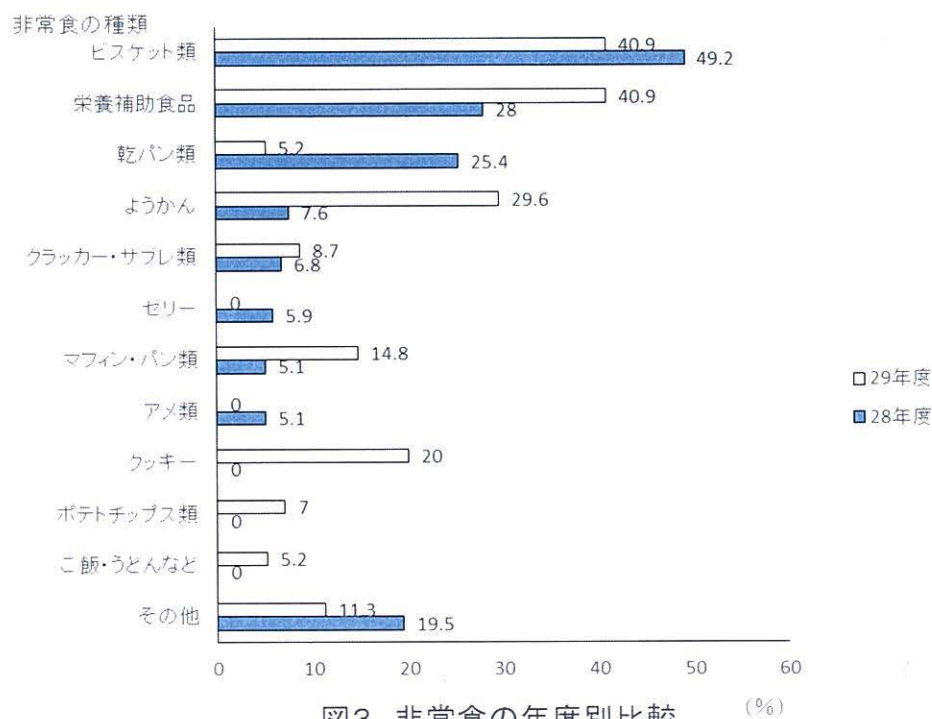


図3 非常食の年度別比較

調査 2（平成 29 年 9 月）では、熱量だけでなく、栄養のバランスに考慮して組み合わせる保護者が増え、長期間保存可能で小さく・高カロリーの「5 年保存の備蓄用ようかん」「栄養補助食品」などが増加していた。缶入りの「乾パン」は減少し、子供が扱える袋か箱入りの非常食が増えていた。調査 1（H28 年 9 月）では、見られなかった「アルファ化米やうどんなどの非常食」「チョコ菓子やチューブチョコ」「ビタミン飲料(数名)」が入っていた。

4) 保護者アンケート

保護者が準備した非常食などを調査したところ、保護者の意識に差が見られた。予想以上に少ない非常食を準備した保護者や多量の非常食をリュックいっぱい詰め込む保護者、賞味期限が 1 年未満の非常食を入れた保護者などが見られた。その原因を探るため、アンケート調査を実施し、困ったことや気付いたことなどを自由記述により調査することにした。また、非常食に記名を行った保護者と記名を行わなかった保護者との意識の違いや記名をした理由を明らかにするために、調査した。

4) - 1. 購入方法（n=98）（複数回答）

スーパーマーケット 61(62.2%)、インターネット 10(10.2%)、ホームセンター 8(8.7%) その他 19 (19.4%) であり、身近なスーパーマーケットでの購入が多かった。その他の記載は、ドラッグストアで購入したものや自宅にあったものなどであった。

4) - 2. 購入の際、気を付けたこと（複数回答）

賞味期限 79 (80.6%)、嗜好 74 (75.5%)、サイズ 38 (38.8%)、熱量 20 (20.4%) の順に多かった。幼児には好き嫌が多く、食べられるものを購入するよう考慮したという保護者が多かった。その他、「少しでも安心できるもの」「栄養バランス」「食べやすさ」「アレルギー対応食」「自分で持てる重さ」「非常食として指定されているもの」を選んだという回答がみられた。

4) - 3. 非常食全てに記名をした理由（自由記述）

98 名のうち記名したと回答した保護者は 36 名であった (36.7%)。そのうち自由記載のあった 31 名の記述を 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 (SCAT) により分析を試みた。表 2 はそのうち 15 名の分析過程を示したものである。

また、記名をしなかった保護者 82 名のうち 2 名から記名をしなかった理由について「幼稚園の休みの日に災害があった場合、園以外の避難してきた方に配布する可能性があると思った」「おやつは他のみんなと分け合えるようにあえて書かなかった」との記述があった。

4) - 4. 非常食を準備する際、困ったことや気付いたこと（自由記述）

98 名のうち記述のあった 63 名を分析対象とした (64.3%)。記述は 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 (SCAT) により分析を試みた。表 3 はそのうち 30 名の分析過程を示したものである。

表2 SCAT を活用した質的データ分析【なぜ、非常食に記名したのか】

ID	テキスト	<1>テキストの中の注目すべき語句	<2>テキストの中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ構成概念	<5>疑問・課題
4	混乱したときでも自分のものだとわかるようにした	混乱した時、自分でもわかる	混乱しない、自分のもの	安心、記名によるメリット	記名の意義	幼児の文字の認識度
19	何があるかわからないので名前があれば役に立つのではないかと考えた	何があるかわからない、役に立つのではないかと	非常事態、混乱	記名によるメリット、未然防止	危険予測	どんな危険やトラブルが考えられるか
20	たくさんの子供達の中で紛らわしいと思った	たくさんの子供達、紛らわしい	間違いが起きやすい	未然防止	危険予測、想像力	
30	持ち物にはすべて名前を書くべきだと思った	すべて名前、書くべき	皆が自分のものを認識できる	記名によるメリット、未然防止	常識、記名の意義	
33	自分の名前を見たりちゃんと用意されていることを知り、安心させたいと思った	自分の名前、用意されている、安心させたい	自分のものがわかる、安心感	安心、我が子への思い	親子の絆	災害時の幼児の心のケア
45	物品の注意が細かいところまで行き届かないと思ったから	物品の注意、行き届かない	間違いが起きやすい、教師の行動予測	未然防止	記名の意義、想像力	教師への信頼度、期待することは何か
46	先生が子供がどれだけ食べたかを確認できるように	先生が、確認	確認してほしい	子供の健康保持	教師への期待	
61	混乱した現場で子供たちが自分のものを確実に1つは確保できるようにするため	混乱した現場、子供たち、確保	混乱しない、自分のもの	他の子供への配慮、安全対策	記名の意義、想像力	災害時に想定される現場の状況
65	もしパニックで荷物がバラバラになったら誰のものかわからなくなる	パニック、荷物がバラバラ	混乱、非常事態、散乱	記名によるメリット、未然防止	記名、想像力	災害時の幼児の心のケア
69	日常ではあまり食べないものなので、子供が自分のものだとわからないから	日常ではあまり食べないもの	非常食は特別なもの、あまり食べられていない	不安、我が子の行動予測	記名の意義、想像力	幼児が食べられるものが確認、自分の非常食を認識
81	同じようなものがあつた場合の取り違え防止のため。非常事態に少しのトラブルも防ぎたい。	同じようなもの、非常事態、少しのトラブルも防ぎたい	混乱しない、自分のもの、間違いが起きやすい	安全対策	記名の意義、想像力、情緒の安定	災害時の幼児の情緒面への配慮
84	アレルギーのあるお子さんが間違えないように	アレルギー、間違えない	食べられないもの、事故	他の子供への配慮	命を守る、食物アレルギーへの対応	幼児の食物アレルギーに対する認識
89	非常時だから先生の手を煩わせないように自分のものだとわかるようにした	先生の手を煩わせないように	教師への配慮	安全対策	記名の意義、想像力	個々の幼児への対応や負傷児への対応等で人手不足
97	自分の名前があつた方が子供が安心すると思ったから	自分の名前、安心する	自分のものがわかる、安心感	安心、我が子への思い	親子の絆	災害時の幼児の心のケア
98	園に持っていくものは全て記入（特に考えず）	特に考えず	無意識	記名の習慣	常識	

ストーリーライン	<p>園で初めて非常食の備えを検討し、非常用リュックの導入を試みた。非常時に保護者が迎えに来るのが困難となりすぐに迎えに来られない場合を想定して、幼児が空腹にならずに安心して保護者が迎えに来るまでの数時間を過ごすことを目的とした。災害時に保護者と離れて長時間過ごすことは幼児にとっては非常事態であり、いかに<u>幼児の情緒の安定</u>を図るかは保育者の重要な役割である。不安や恐怖から幼児がパニックになることは十分考えられる。そんな時に、安心して我が子が過ごすことができることや我が子の<u>命を守る</u>ことを保護者は考え、少しでもできることはないかと<u>想像力</u>を働かせていた。そのことが非常食全てに記名するという行動につながったと推測する。その想像力を促したものは、我が子への思いであり親子の絆であると考え。保護者が想像した災害時に起こるかもしれない出来事には「同じような非常食（間違えやすい）」「食物アレルギーの幼児の事故」「無記名の非常食の存在」「パニック」「幼児の不安」「教師による十分な対応が困難」などがあつた。災害時には予想外のことが起こるかもしれない、また、幼児だから起こるかもしれないということを保護者は認識していた。無記名によるトラブルを想定することは当然であり、持ち物に記名す</p>
----------	--

	<p>ることは常識であると思っている、あるいは、すでに記名することが習慣となっている保護者もいた。我が子への思いから想像力を働かせるに留まらず、他の幼児に食物アレルギーがある子がいるかもしれないと想像し、記名に至った保護者もいた。園での非常食の備えにおいて、<u>食物アレルギーへの対応</u>は一人一人の命を守るという意味で不可欠であり、それを視野に入れて考えられる保護者の存在を確認できた。</p>
理論記述	<p>非常食全てに記名をした保護者は<u>想像力</u>を働かせ、自己で判断し、園の指示がなくても記名をするという行動に至っていた。「なぜ、非常食に記名をしたのか」の真意は、災害時に人為的な二次災害を防ぎ、幼児の心身の安全を確保する必要があると考えた結果であった。災害時に一人一人の幼児の心身の健康保持、<u>命を守る</u>ために、園での非常食において<u>記名の意義</u>は大きい。</p>
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の文字の認識度は発達段階や個人差があり、非常食に記名があっても自分のものだとわからない可能性がある。→記名だけでは不十分であるため、幼児が自分のものだとわかる目印・シールなどを貼る工夫や教師の援助が必要なのではないか。 ・記名のない幼児の行動はどうなるのか、どんな危険やトラブルが考えられるかも考えておく必要がある。→教師の想像力の発揮 ・幼児自身が食物アレルギーに対する認識が低く、非常食を友達と交換、簡単に分け合う可能性がある→事前に指導が必要 ・災害時の幼児の心のケア、情緒面への配慮→日常的な幼児理解をしていく ・災害時に想定される現場の状況→防災教育（避難訓練の多様性） ・負傷児への対応等で人手不足になる可能性がある→推測される→連携（隣接する小学校との連携・地域との連携） ・幼児が食べられる非常食か→事前に食べさせる。自分の非常食を認識させておく。

（下線部は、〈4〉テーマ・構成概念から抽出した語句）

表3 SCATを活用した質的データ分析【非常食を準備する際、困ったことや気付いたこと】

ID	テキスト	〈1〉テキストの中の注目すべき語句	〈2〉テキストの中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ構成概念	〈5〉疑問・課題
3	誰をどのくらいにすれば良いか。小さなものなら他の物（マスク等）も入れて良いのかなと思った	量、他の物	適量、他に必要なもの	園の意向、情報収集	改善への意欲	リュックの中にあつたら良い物品
6	非常時に先生がリュックを広げたときに子供が笑顔になれる商品、また、子供全員が皆それを好きで分け合える商品という観点で選びました。1年毎に中身を改めさせていただけで選択肢が増えるので助かります。	子供が笑顔、分け合える、中身を改め、選択肢	子供達の笑顔、選択基準、非常食の改善	非常食がもたらす幼児の心への効果	改善への意欲 非常食による心の変化	
10	どのくらいの量を準備すれば良いか（1食分？1日分？）	量、1食分？1日分？	適量、情報の提示不足	園の意向、情報収集	準備する意欲	
11	どのくらいの量が適当か？おやつ程度ということでしたが、我が子が実際のときに不安な気持ちを少しでも和らげることができたらという思いから1つ多く入れてしまいました。個人差を少しでもなくすのであればおおよその総カロリーを指定すると良いと思う。	量、不安な気持ちを少しでも和らげる、個人差をなくす、総カロリーを指定	適量、幼児の不安緩和、量の個人差、総カロリーの目安	我が子への思い、共通認識の必要性、園へのアドバイス	改善への意欲 非常食による心の変化	
12	非常食を購入してみても缶に入っているものは、娘が自分で開封できるか心配になりました。先生が開けてくださるのではありませんかと思い、缶のものを持たせましたが自分で開封の練習をさせようと思いました。	缶、自分で開封できるか心配、先生が開けてくださる、開封の練習	缶のふた、自分で開封できない、先生への期待、幼児が開封できた方がよい	幼児が開けられない缶のふた、教師の対応の困難さ、安全性	二次災害予防	安全で幼児が取り扱える非常食

18	カンパンのふたを自分で開けることができないのではと不安です。水の賞味期限がわかりにくかったこと	カンパンのふた自分で開けることができない。賞味期限がわかりにくかった	缶のふた、自分で開封できない。賞味期限の表示確認の困難さ	幼児が開けられない缶のふた、安全性	二次災害予防	製造会社の企業努力
21	今回のお話でネットで購入できることを知ることができた。カロリーを考慮して購入したい。	今回のお話、ネットで購入、カロリーを考慮して	学年懇談会、購入方法、総熱量の目安	国の情報発信	保護者の意識向上	
22	缶詰のパンを準備したが、子供一人で開封が困難。日持ちが良く軽量なものは缶のものも多く、子供自身で食べられるものとなると選択の幅が狭い	缶詰、開封が困難、日持ちが良く軽量、選択の幅	缶のふた、自分で開封できない、缶の長所と短所、選択肢、困り感	幼児が開けられない缶のふた、情報収集	幼児に適した非常食	安全なパッケージ
25	好き嫌いが多いので選ぶのに苦労した。缶のものも子供が開けられるか不安だった	好き嫌い、缶、子供が開けられるか	幼児が食べない可能性、缶のふた、自分で開封できない	幼児の嗜好、缶のふたの危険認識	幼児に適した非常食、二次災害予防	安全なパッケージ
28	あまり水をそのまま飲めないでスポーツ飲料を許可していただけたと助かります。	水をそのまま飲めない、スポーツ飲料、許可	我が子の特性、水以外の飲料、園への要望	多様性、選択肢の幅、我が子への思い、園の意向	保護者のニーズ	園での非常食のボーダーライン
33	何を貰ったら良いか迷った。他のお母さんに聞いて同じもの（ビスコ缶）を買った	他のお母さんに聞いて、同じもの	保護者間の協力、同じ非常食、安心感	情報収集	ネットワークづくり	
45	子供の力で全てできる非常食があったらいいなと思った。食事の代わりになる栄養補助食品にした。お菓子類は一度に消費してしまう可能性がある。1本で十分な栄養が取れるもの。ただ、大人の管理がないと食べすぎるのでマニュアル化してもよいのではないかな。	子供の力で全てできる、食事の代わり、十分な栄養、大人の管理、マニュアル化	子供が食べる非常食、食事を満たす、非常食の栄養、非常食摂取マニュアルの必要性	幼児の健康保持、非常食摂取の共通理解、教師への期待	幼児のための非常食教師の共通理解	商品開発の必要性
55	子供の食べられるものを調べるのがたいへんだった。賞味期限が半日以上か持たなかったり意外に短いものがあった。	食べられるもの、探すのがたいへん、半日以上か持たない、意外	幼児の嗜好、困り感、品物の消費回転率、新たな認識	情報収集、社会の現状	保護者のニーズ	
59	賞味期限の1年以上保存できるものが少なく何軒もまわって購入。	何軒もまわって購入	品物の消費回転率	社会の現状	保護者のニーズ	社会の意識
60	お菓子だけでなく、水を入れると食べられるおこわなどを園で一括購入し、それ以外に好きなものを1〜2品入れるのが良いのではないかな。年長になると食べる量が多いので、我が子は塩系のお菓子が好きですが賞味期限が短いものが多かった。	園で一括購入、年長になると食べる量が多い、我が子は塩系のお菓子が好き	園への要望、体格と非常食の量、我が子への思い	合理的思考、量の個人差、多様な保護者の意識	保護者のニーズ、食物アレルギーへの対応	食物アレルギー対応食品
61	缶に入っているものは先生が開けてくれるのか子供たちで開けて食べるかわからず、子供が扱えるものを入れたい。先生が介入して下さるなら缶のものを買いたいと思います。非常食として販売されているもので子供のアレルギー食材を使用していないものをみると子供が食べないようなものばかりだったのでその点も困りました。	子供の扱えるもの、先生が介入して下さるなら、アレルギー食材を使用していないもの、子供が食べないものばかり、困った	園への配慮、教師の対応への期待、食物アレルギー対応食品の少なさ、困り感	食物アレルギー、幼児の非常食が見つからない現状	保護者のニーズ、食物アレルギーへの対応	食物アレルギー対応食品
62	話を聞いて、カロリーのことを考慮すべきだと気付いた。災害時には簡単に口にでき長時間お腹を満たせるものは幼児・大人関係なく必要だと思った。	話、カロリーのことを考慮すべき、簡単、長時間お腹を満たせる、幼児・大人関係なく	学年懇談会、非常食の選び方、皆の災害時の備え	非常食の理解	保護者の意識向上	
64	カロリーメイトを1箱入れたが、足りるのか心配。幼稚園の備蓄はどれぐらいあるのか。同様に水も500mlで足りるのか？	幼稚園の備蓄、水も500mlで足りるのか	(保護者が想像する)非常食の量、非常食と備蓄の違い	情報提供の必要性、園での非常食の捉え	保護者との認識のズレ	
65	小麦アレルギーのため、選択肢が少なかった。	小麦アレルギー、選択肢が少なかった	食物アレルギー対応食品の少なさ、困り感	食物アレルギー、幼児の非常食が見つからない現状	保護者のニーズ、食物アレルギーへの対応	食物アレルギー対応食品
78	「非常食」として売られているものが意外と少なく探すのに苦労した。好き嫌いが多く、入れられるものが限られる中、午前保育で災害にあったとき、自分がけがもなく家から数時間で園に行けるのかと思うとつい多めに買ってしまった。園にも子供用の備蓄があればいいのですが、用意はないのでしょうか？	非常食として、意外、好き嫌い、数時間で園に行けるか、つい多めに、園にも子供用の備蓄	一般的な非常食、新たな認識、幼児の嗜好、災害時の(保護者の)行動予測、多めに非常食を準備、園での非常食の備えの有無	我が子への思い、園への要望	保護者のニーズ	
79	いわゆる非常食として売られているものは子供が好きではないものも多く、非常事態に緊張した中、少しでもほっとできるように好きなものを選びました。	いわゆる非常食、子供が好きではないもの、非常事態に緊張、ほっとできる、好きなものを選びました	一般的な非常食、幼児の嗜好、非常事態の幼児の心の変化、安心感、非常食による幼児の情緒の安定	非常食がもたらす幼児の心への効果	幼児における非常食の意味	
80	スーパーやドラッグストアのものは賞味期限ぎりぎりのものが多かった。リュックの大きさを考えサイズ。数・どのくらいの時間分の非常食を考えていくかは難しいと思いました。	賞味期限ぎりぎり、リュックの大きさ、数・どのくらいの時間分、難しい	賞味期限の現状認識、リュックに入る非常食の量、目安	非常食の理解、準備の意識	改善への意欲	
81	子供が食べたことのないものをに入れてしまい、そのとき大丈夫かと不安に思った。	子供が食べたことのないもの、大丈夫かな	子供が食べられない可能性、後悔	我が子への思い、非常食の理解	保護者の意識向上	
82	指定の食品等であれば、食べるものや量が同じになり、トラブルも少ないと思われる。アレルギー等の配慮は必要だと思うがそれ以外の人は同じものが良いのではないかな。遠足のおやつとは違うことを子供たちにも分かってほしいと思います。	指定の食品、アレルギー等の配慮は必要、それ以外の人は、遠足のおやつとは違う	同じものを準備する利点、アレルギーのある人となんかの区別、遠足と災害時との違いを理解させたい	合理的思考、マイノリティの問題、教師への期待	保護者のニーズ、改善への意欲	
83	迎えまでの時間と考え(近い)その日のうちに迎えに行けると考えた蓋にした。幼稚園で考えている時間や量がわかると用意しやすかった。	幼稚園で考えている時間や量	時間や量の目安	園での非常食の捉え	非常食の共通理解	
84	子供は大人より好き嫌いがあり、選ぶのが難しいと思った。	好き嫌い、選ぶのが難しい	幼児の嗜好、困り感	非常食の理解、準備の意識	幼児に適した非常食	
91	賞味期限の長いものほど子供があまり口にしないものが多い。改めて、準備するのはたいへんだとわかりました。	子供があまり口にしないものが多い、改めて、準備するのはたいへん	食べられる非常食、新たな認識、困り感	非常食の理解、準備の意識	幼児に適した非常食	
93	非常食のイメージから缶入りのものにした。(在庫がなく3ヶ所回った。お話を聞いて、カロリーメイトや缶入りのビスケットでよかったのかなと思いました。	非常食のイメージ、在庫がなく、お話を聞いて	缶入りの非常食、困り感、保護者懇談会	非常食の理解、準備の意識	幼児に適した非常食	
94	非常食の種類が多さに驚いた。幼児に理想的なサンプルがあったらよい	非常食の種類が多さ、驚いた、幼児に理想的なサンプル	非常食の知識、新たな認識、幼児に理想的な非常食	非常食の理解、準備の意識	幼児に適した非常食	

ストーリーライン	<p>幼児の非常食として、“災害時にすぐ迎えに来ることができない状況を想定し、お迎えまでの数時間、園で過ごすために必要な量”“賞味期限1年以上のもの”と提示したところ、保護者の困り感を生んでいた。「お迎えまでの数時間」にどのぐらいの量が必要なのか、どこに売っているのか、賞味期限が1年以上のもので<u>幼児に適した非常食</u>がなかなか見つけられず困っていた。一方で、社会の現状を知り、<u>幼児に適した非常食</u>を考えたことや実際に子供が食べられるものが少ないことを知ったことを前向きに捉えていると思われた。保護者のイメージした非常食の多くは、缶入りの乾パンやビスケット類であったが、我が子の行動を予測し、自分でふたを開けられないことや安全面を心配しており、災害時に怪我などの<u>二次災害予防</u>の必要性があると気付いていた。さらに、「災害時に少しでも不安な気持ちを和らげる」「非常事態に緊張した中、少しでもほっとできる」という視点で非常食を選ぶ保護者もいた。<u>非常食による心の変化</u>について考えるならば、<u>幼児における非常食の意味</u>も違う角度から考えることができる。また、食物アレルギーのある幼児の非常食は選択肢が狭く準備に苦労が見られた。食物アレルギーへの対応の商品が少ない社会の現状があり、<u>保護者のニーズ</u>にこたえる非常食が求められる。その他の<u>保護者のニーズ</u>としては、嗜好の偏りがある幼児に食べられるものや自分で扱える非常食が手軽に手に入ることでありと考える。</p>
理論記述	<p>幼児の非常食を準備する機会があったことにより、非常食について関心が高まり、<u>保護者の意識向上</u>につながったと思われる。非常食の準備において困ったことの多くは<u>幼児に適した非常食やその量</u>などがわからない、賞味期限の長い非常食が身近な店に売っていないことであった。保護者の記述から、よりよい非常食を<u>準備する意欲</u>や非常用リュックの活用において<u>改善への意欲</u>が高まっていると捉えることができた。【非常食を準備する際、困ったことや気付いたこと】の内容を活かして、<u>非常食の共通理解</u>を進めていくことは大切である。</p>
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・食物アレルギー対応食品 →商品開発、企業努力はどこまで進んでいるのか ・幼児のための非常食 →幼児でも取り扱える非常食（安全なパッケージなど）、幼児が全て自分の力でできる非常食の商品開発が必要なのではないか ・社会の意識→販売店（身近なスーパーなど）で賞味期限の長いものを商品の中に増やす、幼児向け非常食の提案があったらよいのではないか ・園での非常食のボーダーライン →災害時にあったらよいものをどこまで準備しておくのがよいのか（設置場所、保管場所、費用などの課題） ・非常食の他にリュックの中にあったらよい物品にはどのようなものがあるか

5. 考察

(1) 保護者の安全意識

保護者が準備した非常食を調査した結果、初年度は長期保存可能な缶のものや栄養補助食品が多かった。購入場所は身近なスーパーマーケットが最も多かったため、賞味期限が比較的短いものが多く（店の特徴として商品の回転が速いため）探すのに苦労していたことが伺えた。幼児は大人に比べて好き嫌いで食べられないことがあり、保護者は、幼児の食べられるものを選ぶことを優先して考えていた。保護者アンケートによれば非常食を購入する際考慮したことは賞味期限と嗜好が多く挙げられた。購入の際気付いたこと悩んだことの中で、「賞味期限の長い缶のものにするか子供が開けられる箱入りのものにするか悩んだ」「缶に入っているものは子供が開けるのが困難（危険）」などがあり、保護者の安全意識が感じられた。缶のフタは鋭利であり二次的災害につながる危険があると考えられる。また、非常食全てに記名をした保護者の理由からは、非常事態が起こった場合に起こりうるトラブル回避や教師の教育活動への理解や期待などが伺えた。食物アレルギーの子供に対する配慮や我が子以外の幼児への思いやりなど、記名をした理由とあえてしなかった理由のどちらにも、保護者の鋭い想像力が発揮されていた。食物アレルギーのある幼児が危険な目にあってしまう、先生たちの手を煩わせる等、我が子のことに留まらず、非常事態の状況を想像し判断しており、保護者の意識の中でその際に予想される出来事が想起されていたと考えられる。さらに、たいへんな時にそばにいてやれない、不安を少しでも取り除いてやりたいという親心から、非常食に我が子へのメッセージを書いた保護者や何かの役に立つかもしれないという思いからティッシュやナイロン袋をリュックに入れる保護者の姿も見られた。幼児期の子供をもつ保護者ならではの意識であると思われる。

(2) 非常食の変化

初めて非常食を準備した平成 28 年度に比べて、平成 29 年度には、非常食全てに記名がされ、幼児が安全に扱えるもの（紙箱や袋入り）に改善された。非常食の種類も豊富になり、長期保存可能な（3 年～5 年保存）のものが増加したり、栄養面を考えて数種類を組み合わせる保護者が増加したりした。しかし、総熱量の目安（約 500 kcal～700kcal）以上の多量の非常食をリュックに入れる保護者が少し見られた。意図は不明であるが、念のためという意識が働いているのではないかと考えられる。また、平成 29 年度はアルファ化米やうどんなどの非常食や栄養ドリンクなどの非常食が加わった。非常食に対する保護者の意識が高まり、非常事態の想定レベルが上がったためではないかと考える。実際に災害により交通手段が遮断され、保護者自身の安全も危ぶまれる事態が起きた場合、子供を数時間ではなく数日預かる場合も発生することも考えられる。水においても 500ml の水では足りないため、備蓄用の水が必要であることは明白である。そこで、備えをどこまでするかという選択に迫られる。このような思考の流れが安全意識を育むことにつながっているように考えられる。ただ、本園での非常食は“地震等の災害時に保護者が迎えに来るまでの数時間をしのげるもの”としており、備蓄とは異なるものである。また、幼児の個人用リュックを用

いた目的は、食物アレルギーの幼児への対応と二次避難の際の活用（持ち運べるという利便性）である。そのため、軽量でかさばらないものが望ましいが、保護者の中には非常食の量を園で示した目安（500～700 kcal）より多く入れる人も数名であるが見られた。保護者アンケートでは、「我が子が実際の時に不安な気持ちを少しでも和らげられることができた」と思い1つ多く入れてしまった。」という気持ちの記入や「園に備蓄はどれくらいあるのか」など冷静に園の対応を問う質問があり、実際に非常事態が起きた時に子供を守りたいという保護者の真剣な思いが感じ取れた。

（３）保護者の意識の変容

初年度には購入先や種類や量に戸惑う姿が見られたが、次年度には、保護者同士が情報を交換したり、一緒に購入し分け合ったりするなどの協力し合う姿も見られた。災害の被害を軽減するためには、国・地方公共団体が中心になって行う「公助」、自主防災組織・ボランティア等による「共助」、個々の住民による「自助」が必要とされている（原岡，仲井，尾島他，2012）。園で行う災害時の備えを「公助」と考えると、地域や保護者同士が協力し合うことは「共助」、保護者が家庭で行う備えは「自助」と言えるのではないか。非常食の購入時に保護者同士が情報を交換し、長期保存のできる非常食を共同購入し分け合う姿はまさに、困ったことに遭遇した時に同じような立場にある者同士が助け合う「共助」の姿につながるものとする。

（４）保護者の安全意識を活かした実践

保護者が幼児の非常食を準備するときに気付いたことや実際に災害時に起こりうることを想像し考えたことなど、保護者アンケートから伺える保護者の安全意識を活かし教育活動に活かしてきた。大切な我が子の安全を願うからこそ想像力が働いていた。「もしも○○だったら・・・」という思考は災害時にはとても大切であり、園においての災害の備えについても考えるきっかけになった。そのため、非常食だけでなく保温用アルミシートを幼児一人一人に購入し、充実を図った。また、避難訓練に非常用リュックを活用し幼児の意識を高める取組も始めている。

6. おわりに

保護者への引き渡しが行えないような災害時に、迎えまでの幼児の命の安全を保障することは重要な課題である。非常事態を想定して園で非常食を準備する取り組みを通して教育実践（懇談会で非常食について説明、避難訓練時に非常用リュックを活用するなど）に活かしてきたことにより、保護者や教職員、幼児の意識を高めることにおいて役立てることにつながったと思われる。新幼稚園教育要領の「健康」領域の指導内容に安全について、「危険な場所，危険な遊び方，災害時などの行動の仕方が分かり，安全に気を付けて行動する」ことが明記されている。その内容の取り扱いについて、「安全に関する指導に当たっては情緒の安定を図り，遊びを通して安全についての構えを身に付けて，危険な場所や事物などが分かり，安全についての理解を深めるようにすること。また，交通安全の習慣を身に付

けるようにするとともに、避難訓練などを通して、災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにすること。」とされている。避難訓練にこの非常用リュックを活用することで、災害時の具体的な場面を想像して行動したり、幼児が家族の迎えが来るまで安心して過ごしたりすることにもつながると考える。また、この研究を通して、幼児にとっての非常食はお腹をいっぱい満たすだけのものではなく、親がそばにいない中、少しでも不安や恐れを忘れ、安心していられるために大切な役割を持っているということにも気付かされた。

今回、教育現場で非常用リュックを導入し、非常事態に備えた取り組みを実施する中で生まれた疑問に対して、研究の視点を取り入れながら評価したり、改善したりすることを繰り返し、教育活動に生かしてきた。なぜ、保護者はこの非常食を準備したのかなど、表面化した事象への違和感を放置せず、保護者の意識（真意）を探る視点が教育現場に役立つことを改めて知ることができた。特に、幼児期においては保護者との連携が大切であり、園と保護者が相互に意識を高め合う関係を大切に今後も実践していくことが大事であると考えている。

謝辞

本研究を進めるにあたり、非常用リュックの中身調査について研究の視点や分析方法など温かくご指導頂いた金沢大学人間社会研究域学校教育系 河田史宝教授に深く感謝いたします。

参考文献 ・ 引用文献

- 1) 新幼稚園教育要領 文部科学省 平成 30 年
- 2) みんなで減災（パンフレット） 内閣府
- 3) 松澤明美，白木裕子，津田茂子：乳幼児を育てる家庭における災害への「備え」－東日本大震災を経験した通園児の母親への調査より－，日本小児看護学会誌 vol23no1 p 15-21, 2014
- 4) 清水益治，千葉武夫：幼稚園・保育所・認定こども園における災害マニュアルの実態，帝塚山大学現代生活学部紀要 第 12 号 75～84, 2016
- 5) 野村菜穂，河田史宝：「学校保健」，金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校紀要 2017
- 6) 大谷尚：4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）2007
- 7) 鈴木薫，浅田知恵，五十嵐理恵他：『自然災害』に遭遇した子どもへの養護教諭の対応，日本健康相談活動学会誌 Vol. 9 No. 1, 2014